

は、地域教育機関（小学校、中学校、高校、大学短期学部）と地区自治会によって組織された学外評価機関であり、本取組の到達度を評価し、改善点を地域連携室およびセミナー担当教員に報告・指導するものである。

2.3 セミナーの教育方法と評価

2.3.1 教育概要

セミナーの考え方は、図1に示すように「人間力の向上」のために理論と実践のサイクルを何度も回すことであり、①自分を知り、②学び、③試し、④振り返ることにある。

また、実践活動で重要なことは、企画段階で目的や要求条件を明確化することであり、TAという要求条件を論理的に構築するためにプロブレム・シーキング手法⁴⁾の「5つのステップ」を活用した。つまり、図2に示すように、TAを実施するために何をすべきかを、①目標（ゴール）の確立、②事実の収集と分析、③コンセプトの発見と検証、④要求条件の決定、最後に⑤課題の提示といった手順を追って検討した。

セミナーの内容は、図3、表1に示すように15週全体で2回のPDCAのスパイラルアップを行うようになっている。特に、第2週のPlan、第6週のCheck・Action・Plan、第12週のCheck・Actionでは、ゴールの確立から課題の提示まで学生自身が主体性を持って取り組むようワークショップ形式（以下、WSと略す）で実践した（写真1、2）。第3週～第5週および第8週～第11週における計7回のセミナーの実践（Do）では、毎回活動前にプリントを用いて5つのステップを確認し、活動後に実践内容の検証を自己評価するものである。

2.3.2 教育内容と評価

実践の場は、中学校が実施する「質問教室」のTAとした。質問教室とは、放課後に英語と数学それぞれ1クラスずつ開講するもので、自主勉強する中学3年生の多様な質問に中学校教諭が答えるものである。学生は、中学校教諭の指導の下、中学生をアシストすることとなる（写真3、4）。

ここで、TAを実践するための必要な素養は大きく以下の5つにまとめられた。①学生自ら「教養」を身に付けること、②他者に対する観察力・対応力を学ぶこと、③教え方を自ら考え、創造と実行力を学ぶこと、④ヘルプとアシストの違いを理解し他者の力を引き出すこと、⑤学生は自らが地域の構成員であることを理解し地域貢献の精神を学ぶことである。

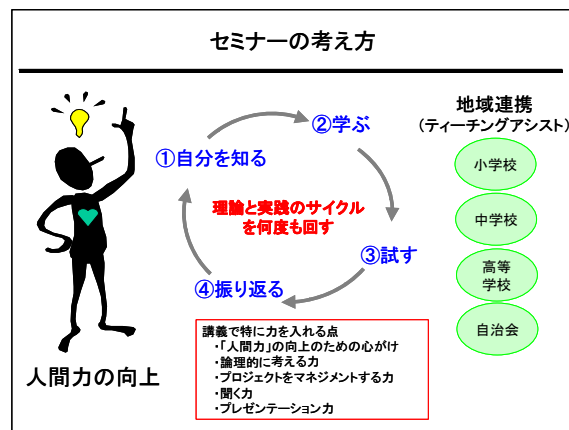


図1 セミナーの考え方

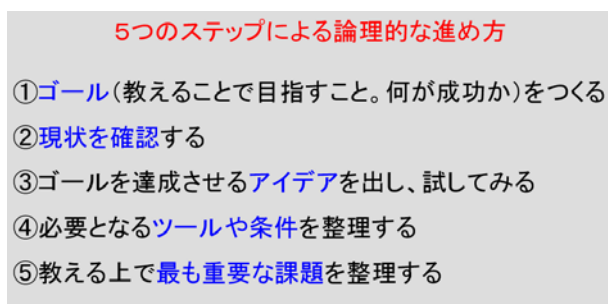


図2 5つのステップ（プロブレム・シーキング）

第1週	目指していることの説明	①自らを知り、②学ぶ
第2週	第1回ワークショップ(WS)	③試す
第3週	実践と反省(TAの実践)	④振り返る
第4週	実践と反省(TAの実践)	①自らを知り、②学ぶ
第5週	実践と反省(TAの実践)	③試す
第6週	実践と反省(TAの実践)	④振り返る
第7週	第2回ワークショップ(WS)	①自らを知り、②学ぶ
第8週	ゲームによる気づき	③試す
第9週	実践と反省(TAの実践)	④振り返る
第10週	実践と反省(TAの実践)	①自らを知り、②学ぶ
第11週	実践と反省(TAの実践)	③試す
第12週	第3回ワークショップ(WS)	④振り返る
第13週	発表	①自らを知り、②学ぶ
第14週	公开发表	③試す
第15週	まとめ	④振り返る

図3 セミナーの内容（理論と実践を繰り返す）

表1 セミナーにおける実践状況

PDCAサイクル	内容	日時	参加人数
PLAN	講義	11月11日(金)	39
	講義、WS	11月12日(土)	17
DO	中学校でのTA実施	11月15日(火)	12
		11月22日(火)	15
		11月29日(火)	16
		12月13日(火)	13
CHECK ACTION PLAN	講義、WS	12月17日(土)	12
DO	中学校でのTA実施	12月26日(月)	14
		12月27日(火)	14
		1月6日(木)	14
CHECK ACTION	講義、WS	2月4日(土)	18
PLAN: 計画 DO: 実施 CHECK: 確認 ACTION: 改善			延べ人数 184

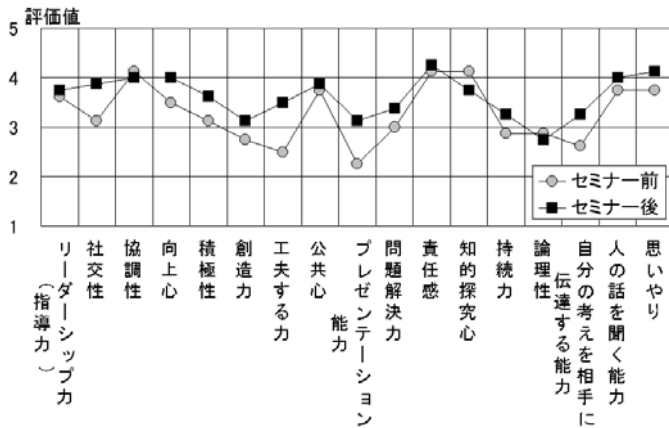


図4 セミナー前後における人間力評価

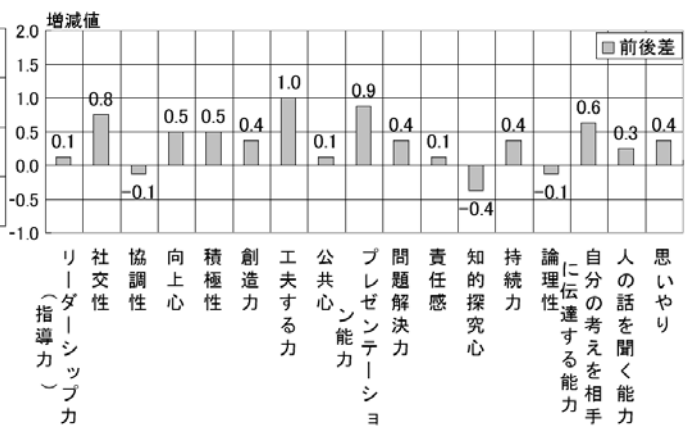


図5 セミナー前後における人間力の変化

身の人間力向上に寄与することが把握できた。差異が減となった項目において、知的探求心はもともと高評価であったことから実践後に自分を謙虚にみつめられる姿勢が表現されたものと推察された。なお、支援学生個々人の結果においても、総じて人間力の向上が図れた。

3.2 教育プログラムの波及効果

TAを実施した中学生（n=87名）に対し、アンケート調査（SD法による5段階評価）を実施し、プラス評価（かなり良かった、やや良かった）について検討を行った。

中学生の評価値において、質問教室の実施に対し99%が良好と判断し、教え方、質問のしやすさに対しては、それぞれ97%、91%が良好と判断した。次回参加希望の有無に対し100%の生徒が参加したいと回答しており、受講者である中学生も評価していることが理解できた。

セミナーの単位を取得した学生（n=18名）に対し、本活動の感想を記述式で求めたところ、「人に教える難しさ、プレゼンテーション能力、マネジメントの仕方を授業で学び、TAで実感した」とのことであった。また、「ゴールを設定する大切さ、人をリードする難しさ、プラス思考の大事さ、確認することの大切さ、自分自身と向き合う難しさ」など、人間力の重要性に気付くとともに、「表現力、コミュニケーション能力、自信、やりがい、新しい自分」など、自分自身を知り、自らの成長を実感したとの評価を得た。

なお、単位取得の対象とはならない本科1年～3年生の参加者が多数存在したことは非常に有意義であり、セミナー参加を通じて「自分の欠点に気付いた」、「自身の正確な評価ができた」、「必要

とされる能力に気付いた」、「今後の課題が発見できた」、「新たな能力を得た」、「自身の成長につながった」などの感想を得た。

4. まとめ

本論文は、地域の課題解決と学生の人間力向上を目指した教育プログラムの開発において、その教育方法と評価手法を報告したものである。

本プログラムの特徴は、人間力の定義を行うことで定量的な人間力評価を可能としたこと、PDCAサイクルおよび5つのステップを踏まえた教育方法が人間力育成に有効と判断されたこと、ワークショップとティーチングアシスタントを結合した活動が学生の人間力育成に有効と判断されたことにある。特に、社会人としての基礎的素養、論理的思考法および地域連携手法を教授する教育内容の特徴から、学生の工夫力、プレゼンテーション能力、社交性の向上が顕著となった。

今後も地域や社会で求められる能力を明確化し、地域連携および教育機関連携を踏まえた教育プログラムの開発と検証を実施する予定である。

参考文献

- 1) 経済産業省経済産業政策局：社会人基礎力に関する研究会「中間とりまとめ」報告書、「教育教員研究集会」、<http://www.meti.go.jp/press/20060208001/20060208001.html> (2006)
- 2) 市坪誠、山口隆司、他6名：「地域連携を踏まえた学校間教育交流のあり方について」、pp.446-447、平成17年度工学・工業教育研究講演会講演論文集(2005)
- 3) ダニエル・ゴールマン：「EQこころの知能指数」、講談社(1996)
- 4) ウィリアム・ペーニャ、スティーブン・パーシャル：「プロブレム・シーキングー建築課題の発見・実践手法」、彰国社(2003)